
きまぐれ神

月見 白豚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きまぐれ神

【Nコード】

N2728Y

【作者名】

月見 白豚

【あらすじ】

神の頂点に立つ創造神と呼ばれた神様の気まぐれにより起きた人類の危機

ここまで聞いて「なんだよくある小説のパターンじゃん」と思った読者の諸君、多分その通りである。

まあ気にするな。神の気まぐれはどこにでも転がってるのだからね

始まりのきまぐれ（前書き）

皆様どうも、初めまして白豚と申します

この小説を手にとってというかクリックしていただきどうもありがとうございます

疲れない程度に読んでいただければ幸いです

始まりのきまぐれ

「創造神様！創造神様！」

ここは地上から遙か遙か彼方

遠い遠い世界「天国」

国が成り立っているその土地にはいわゆる王である「創造神」がいた
「なんだ・・・うるせえな・・・聞こえてるって」

だが問題なのはその創造神が出来が悪く、統率力がまるでない、他の者から全く信用されない神だった

「人間が増えすぎておりますぞ、これは異常事態であります！」

さらにその神は年齢が相当若いと来た

「別にいんじゃない？うじゃうじやいようが知ったこっちゃねエしよ」
しかも神にそぐわぬ黒髪で礼儀を知らない馬鹿だった

「神は分かっているらしいです。人間が増えれば増えるほど全宇宙を滅ぼす力を持つことを！」

そんな男がなぜ、大宇宙を作り出す神の頂点、「創造神」の座につけたのか

「滅ぼしたんだったらまた作ればいいジャンよ」

それは

「そんな軽いことじゃないんですよ！！」

彼が強かったからである。

ここは地上、天国から遠く遠く離れた世界

時刻：12時28分聖京高校屋上、「昼食の時間」

「つまそうな飯に囲まれ、吹く風もさわやかだ、相変わらず世界は平和だぜ」

空を見上げ、弁当を取り出しながら周りにいる友達の飯をのぞき見る
「つまそうだな」「まあね」「くれ」「無理だし」

「俺のやつやるから」「やべっ落した」「ああーもう食べねえーじやねえか」

「お前のせいだろうが」「まあまあ落ち着けて俺のやつやるから」こんな会話が続けている、続いている

「ああ、また世界は平和だなあ・・・」

青年がその言葉を口にした直後、地上に何かが落ちてきた

そして天国、その頂点「創造神のいるところ」

「じゃあ、お前がそんなに人間減らせてって連呼するんだったら減らしてやるけど、最近できたアイツ地球に送ってみるよ。そうすれば一気に減ると思うしさ」

ゾワゾワつと寒気が襲う

「アイツ・・・ですか？」

ごくりと唾を飲む音が聞こえた

「そうそう、今70億人だっけ？人類って、ずいぶん栄えたなあ・・・でもアイツ一体あつちに送れば50億まで減るっしょ」

確かにそうですが
と言いかけた瞬間、神は無邪気に笑っていた

その表情を見て凍りついた場の空気が次の神の一言でさらに凍りつく
「そいつ、五体くらい地球に送ろう」

人類を滅ぼす一言だった

ここは聖京高校から少し離れた繁華街

「凜、学校さぼってここに来たけどさあ、これ結構学校から近くない？

さぼってる意味くない？いつでも来れるし」

凜と呼ばれた女はボーッと空を見上げ「そうね」と頷くものの

何か別のものに気が向いてるようだ

凜の隣の女もそれが気になり空を見上げた

ドオオオオオン

あまりにも歪な爆発音

それは人類にとつて滅亡の鐘だった

大きな煙が音とともに晴れ、そこに現れたのは・・・

人の形をした、怪物5体。男3人女は2人

だがただ一つ人ではない個所があった

「・・・眼が、真っ黒・・・」

それはエイリアン「グレイ」のような眼だった。

凜の隣にいた女は怖くなって逃げ出した。

「あ、茜!!」「凜も、凜も早く逃げて!」

そして茜は気づく

彼女らの近くにいた一人のおばあちゃん。

動けないのか地面にうずくまって何かを言っている

聞き取れなかったが多分、そのおばあちゃんはこう言っていた

「死ぬ、みんな死ぬ」その言葉の意図は分からなかった

「助けて助けて」誰に求めているのかも分からない

グレイのような眼をした男の一人はそのおばあちゃんをつかみ取り

眼をきよろきよろとさせ「助けて・・・殺さないで」とおばあちゃん

んが言ったあとすぎ・・・

その身体を拳で握りつぶした

血が飛び散り、凜の顔にも貼り付く

「きゃあああああああああああ!!!!」

茜が叫び声をあげたあと、茜の足は驚くほどに動いていた

「凜!!お願いだからそこから離れよう!!あれはやばいよ、死ん

じやうつて!!」

さっきまではにぎやかだった繁華街、もうすでに人影はなかった

「凜っ!!!!」

凜は動かない、動けない、目の前に対峙する人とは思えない人の形

をした怪物のいきなりの出現に茜は凜の後ろ姿から何を思っているか全く感情がつかみとれなかった
凜はつぶやく

人類にとって予想外の一言を、悪魔のつぶやきを

「凄い……」

えっ？

、、

聖京高校屋上

昼飯を食べ終えた生徒たちは屋上から去っていく

「学校の一番の至福の時間が終わっちまったな」

残念そうな顔をする一人の男、鬼空 御影は屋上からちようと見える繁華街が相変わらずの賑わいを魅せているため、たそがれた

隣に座っている男は御影の一言を聞き「繁華街に行きたいんだろ？」と心中を見破ってみせる

「あそこの飲食店の料理は全部上手いからな。それに知ってるか？凜と茜いるだろ？あいつら今日学校さぼって繁華街行つてんだとよ。近いからいつでも行けるだろうにさ……」

「ふーん……」凜という人物を御影は知っているがたいして興味はないそぶりを男にみせる

その時だった

あの爆発音があった

まるでかいかい雷が落ちたような音

屋上まで届く音だ、だが空は全くの晴天だし、繁華街からは煙が立っている

一体何が

っ……………

御影は屋上から繁華街の様子を見続けていた

男も爆発音が気になり立ちあがった

繁華街の煙はなかなか晴れることはなく屋上からは何があったのか

全く分からない

御影は決心する

それは凜や茜を心配する気持ちもそれなりにはあったがそれ以上にあることが知りたかったから

御影は屋上から飛び出し、階段を駆け下り、昇降口から外に出て制服のまま繁華街へ向かう

男も御影の行動に興味を示し、それについていくことに決めた学校では次の授業のチャイムが鳴った

そして御影は最後まで気づかない、気付けなかった

御影と男の後ろに何者かがいることに気付けなかった

それは遙か後方というわけではない

御影と男のすぐ後ろに二人が走る速度のままで音もなしについてきている人物が一人いたことに

なぜか気付けなかったのだ

創造神はたった一言これから始まる物語に言葉を付け加えた

「楽しみにしているようにね。何を楽しみにするかは君達の自由さ、人間ども」

そして始まる

神のきまぐれが。

5人の怪物達と背中の人

「僕は人間が見ていたい」

御影が全速力で繁華街で向かう中、茜は混乱の中にいた

「今、凜は何と言ったのだろうか？」

・・・

・・・ッ」

聞き間違いであってほしい

もしくは今日の全てが夢であってほしいと願った

だがもしも、凜が言ったことが聞き間違いじゃないのだとすれば

怪物がおばあちゃんを素手で握り潰し殺した光景を「凄い」と表現したのだとしたら

凜は異常である

さっきまで隣で話し合っていた親友のはずだった

今まで遊んだり語り合ったり泣いたり笑ったり感情を共有してきたはずだった

だが今の彼女は明らかに違う

茜はおばあちゃんを躊躇いもなく殺した怪物らよりも

凜に恐怖心を覚えた

なぜなら茜は見たからだ

見てしまったからだ

凜が凄いと呟いた時、凜は明らかに

・・・、

笑っていたという事実を・・・。

怪物たちは動けずにいた

それは主に二つの理由がある

まず骨ごと握り潰しバラバラに殺した殺人風景を目前にしたにも関わらず、目の前の少女はなぜ笑っているのか？

声を押し殺し、顔の表面だけに笑みが貼りついている

怪物もこれほど不気味な人間は見たことがなかった

確かに人を殺した後、気持ちが悪く逆上し恐ろしさから気を紛らわすためか高らかに笑う人間も見たことはあった

復讐から殺人を犯し、復讐を成し遂げた後、その喜びから笑みを浮かべる人間も見たことがあった

だがいま眼前にいる少女の喜びはまるで別種のものだった

そしてこの少女に興味もわいてきたのである

そしてもう一つの理由、目の前の女の価値を見ていたからだ

怪物たちは無駄に人を殺戮するために来たのではない

増えすぎた人間を減らすために送り込まれただけだ

それは地球にとって価値のある人間は残し、価値のない人間は殺すが目の前の人間の価値を見るにはもう少し知る必要があると判断した

創造神ならば自分が作り出した生物のデータなどを管理しているはずだがあの創造神がそのようなデータを毎日更新しているとは思えないし、管理できるとも思えない

怪物はまだ生かしておこうと考えた少女の後ろにいた女もいるがあれもすぐに殺すべきではないと判断した

そんなことを一瞬のうちに考えていた怪物はある者たちがここへ向かってくる気配を感じ取った

「・・・これは二人か・・・」

なぜ向かってきているのかは分からないがものすごい速さで接近してきているのは確かだ

それにさっきまで繁華街にいた連中が警察に通報しているのはほぼ間違いない、警察とやらの組織がここに来るのも時間の問題だろう・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

創造神との通話もつながるころだろう

しな・・・

怪物のリーダー格とも思われる男のような姿をした怪物は凜に向って話しかける

「・・・人間、そなたの名は何だ？」

凜は驚いた

それは怪物が初めて言葉を口にしたことへの驚きもあったが自分に話しかけている。

自分の名前を聞いていることについての驚きが大きかった

「・・・・・・・・凜」

「凜・・・か、覚えておく」

さて、

怪物は意を決し、天空を仰ぎみた

創造神様、つながりました。

お話し下さい

「さて、」

話そうじゃないか

「皆さんどうも。創造神だ。この世界を作り上げた神だ。神は人間の創造物だというのがはつきりいつて全くの逆だアホ共め。人間が生物の頂点に立っておるからって図に乗るな。君たちはすべて私が作ったのだ。生きていることを素晴らしく思いたまえ」

さあこれから君達には生死をかけた日々を過ごしてもらおう
なるべく自分の世界に対する存在価値を、あげておくんだね。
さあ、じゃあルール説明をしようか

これから行う人間価値ゲームのね

ルールを確認しようか諸君達

「死ぬなら愛が込もった死に方をしてみたかったなあ・・・」

「ルールは簡単だ」

「たとえ人間のように馬鹿でもすぐに理解できる」

人類は混乱した。こいつは何を言っているのだろう？

いきなり聞こえてきたこの声はいったい何だ？

この声は何処から聞こえてきている？

様々な疑問が地球人全員の心に留まった

「こんな話をしている間にも死にそうな人間もいれば生まれてきた人間もいる」

創造神が地球人の心に話をしている時、人間は各々行動が違った仲間を集める者

じっくり話を聞くもの

興味のない素振りで自分のしたいことをする者

耳をふさぐ者

金を使う者

知恵を使う者

権力を使う者

もちろん、疑う者が大勢いた

「俺は君たちの心に話しかけている。全世界中どここの誰でもこの声を聞き取れるはずだ」

それは確かにそうだった

周りの人間達もこの声が聞こえているようだ

凜も、茜も、御影も、怪物達も全員聞こえていた

「では説明する。人間にはそれぞれ地球に存在する意義がある。生

きることは義務だ

人は死のうと思っではならない。人は生きれる限り生き続けねばならない。それは人間にとって神にするべき最高の孝行だ。分かるか？」

聞いている人間と、聞いていない人間

「たとえ自分の人生がどん底だろうが生きることが罪ではない。存在することは罪ではない

罪とは悪いことをすることだ」

創造神はいきなり人間に説教じみた言葉を吐きかけた

「だが、罪は善きことをすると無くなっていく。善きことは悪しきことをすると減っていく」

怪物たちは何も行動を示さないまま、まるで今まで動いていなかったかのように見事に止まっていた

「この法則で成り立つのが人の価値。人間価値ゲームの根本的なルールだ」

御影はこの時、凜や茜のもとにたどり着いた

凜は立ち尽くしているが、茜は蹲り、震えている。

「君達、人類は増えすぎたんだ。それはこちらにとっても管理しきれないため非常に困る。」

怪物達は「いや、あんた初めっから管理する気ないだろ」と思ったがここはスルーした。

「だから、人間の数を減らしたいと思う。思い切って1万人ぐらいに」

「いや、減らしすぎです。創造神様お考えください。そんなに減らしたら人間は生きていけません」

怪物達はあまりにも減らし過ぎの人数のため、ここは突っ込みを入れた

「あ、そう」創造神はそうに少し残念がって訂正を加えた

「じゃあ、最低限20億人まで減らすから、地球人間価値ランキングベスト20億に入ればいいだけの話だ。簡単だろう？自分の価値をあげればいいだけの話なんだから。それと地球に住む権力者の皆様方いるでしょ？あんた達この話聞いてると思うけどさ。安心するのはまだ早いと思うよ。自分達は全く関係ない話だとも思ってるんだったらここで全員殺すよ？」

確かに地球中で権力者は「自分はお金も持ってるし社会に貢献しているはず、周りのドブの様な人間共に比べたらこんなゲームは余裕」とか思ってた人間もいるだろう

だが創造神はそんなことは意味のないことだと権力者達に忠告した
「君たちは上でも何でもない。下でもない。これは人間の価値のゲームだと言ったはずだ。」

つまり、このゲームは人間そのものの価値を競うゲーム。だからさっき言っただろう？

「悪しき者は負けるってね」

「何をすれば悪しき行為なのか。善き行為なのか。よく考えて行動することだね」

創造神はそして現在の人間にとって教訓ともいえるべき事を口にする

「人間にひとつだけ問いたい。君達は成功者の最低限必要な能力を知ってるかい？」

創造神はよくある人生相談本のような・・・どっかの良い奴ぶった偽善者のような言葉を
・・・

「それはね、人の話を聞く能力だよ」

そんなことを言いながら、人は地球を闊歩しつつ、混乱に堕ちつつ、
様々な考えを持ち、

人間は創造神のきまぐれに惑わされていた

冒険RPGのエルフみたいな服着たちっちゃん人

「独りにしないで・・・」

ルール

目的：人類の数を20億まで減らすこと

人類の生きる条件：自分の人間そのものの価値を高める事

備考：創造神は生物を殺すことはできない。

空に現在の人類の数、死んだ人類の数、怪物の数、死期が近い人類の数

（それら他に必要な情報があれば加える）を表示する

なおこれらのことは創造神のきまぐれにより変更する可能性があります

繁華街中央通り

。

昼過ぎだが全くひとけのない不気味なほど静かな空間に全く普通の

高校生が3人

一人は蹲り怯え

一人は静かに微笑み

一人は混乱の中にいた

その空間には歪な姿をした「怪物」と表現が出来る怪物が5体

一人は興味がなさそうに

一人は常時動き回り

一人は素敵な笑顔を浮かべ

一人は静かに落ち着いていて

一人は殺意の塊だ。

静かに落ち着いて凜の前に立ちつくしていたリーダーっぽい怪物が、あらゆる意を持ってあらゆる事実を三人に告げた

「人類はこういう運命だ。仕方がない。増え続けるのも困るのだ。別に私が殺さなくても人間の目の前で人を一人殺してしまえばそれを見ていた人間は勝手に自殺する者もいるだろう」

「怒り、無謀にも私達に襲い掛かってくる者もいることだろうが、そこが人間の愚かなところだ。」

「そういうのを馬鹿というのだ。」

全くの無表情で言葉を紡ぎ出す怪物の後ろの別の怪物たちはそれぞれがその場を立ち去り、移動を始めていた。

いつの間にか残り4体の怪物達はその姿を消しており、時折人間の悲鳴が聞こえてくる

世界中にバラバラに散らばった怪物たちはそれぞれの「仕事」をそつなくこなしていた

「受け入れなければならないんだよ」

そして怪物は運命の事実の続きを語り始める

「人類はこの運命を受け入れなければならないんだ」

そして顔を伏せ、怪物は肩を震わせていた

「最後に一つ言っておく……」

それは泣いて悲しんでいるのか、笑って喜んでいるのか……。

「神の力を甘く見るなよ」

人類にとって絶望的な最悪の日だった

この騒動が一段落つき、本当に人類の数が20億人まで減った時は、カレンダーに「最悪の日」という記念日が出来ることだろう
すでにTVの全てのチャンネルがニュースに切り替わり、どのチャンネルも現在地球に起きている騒動を取り上げている
そして人々は見た

天から落ちてくる殺人鬼を。
そして悟る

人類のほとんどがこの時、危機を感じてこう言っただろう
「逃げる」とたった一言

だが人類の本能的なその行動は創造神が求めていた理想の行動とは全く異なった

そして創造神が予想していた行動とぴったり重なった
ただ人類の全てが逃げていたわけではない

その人間達が地球の生きる少しだけの希望だったに違いない

だが、怪物は気づかない

人間は気づかない

創造神すらも気づかない

怪物が地上に落ちてきたころと全く同じ時刻

聖京高校に落ちてきていた全く別の生命体の存在を……

今から少し前、怪物が地上に着陸してから数分後、聖京高校から徒歩27分の距離地点

そこには二人の男が走っていた

一人は鬼空 御影といわれるクラスの人気者であり、成績優秀、運動神経抜群。喧嘩もかなり強かった

もう一人は師木 蓮夜、こちら運動神経抜群で、学年一足が速く、頭はそこその普通の高校生だ

この2人は繁華街で起きた明らかな以上に気付き、「凜」というクラスで一番可愛らしくミステリアスで謎めいた女子高校生が危険だと分かるや否や正義のヒーローと言わんばかりにかけ出した片思い中のアホ2人！！・・・というわけではなく御影はあるものを見るために駆け出し、蓮夜は面白そうだったのでついてきてみたというだけだったのだが、ともかく2人は繁華街に向け足を速めていた
実際2人とも嫌な予感はしていた
いつもより足の歩みが重く感じられた

「隕石でも落ちてきたか？」と軽く言えるものではないが
そう思うのがふつつであると思う

でもあの時落ちてきたのは確実に隕石ではないと断言できた
御影は見た。はっきり見えた。落ちてきているのは確かにはっきり
と
・・・ッ

人の形をしているように見えた

それに実際に隕石だとしてもおかしい
それはいきなり現れたのだから
宇宙から落ちてきたのではなく、空にいきなり現れ、空から降ってきたのだから

空は清々しいくらい素晴らしい晴天だった

空は気持ち悪いくらいに晴れ渡っていた

空は地球を守るかのように世界を覆っている・・・。

そして御影と男の後ろ20? ちょい後方にずーっとついてきている生命体がいた

誰にも気づかれぬままずーっとついてきている

体は小さく、身長100? ほどだろう。どこかマスコットキャラクターのようなようだ

冒険RPGのエルフの様な服を着ている

黒髪で眼はパツチリとしていて手や足は少し短く指もまだ小さい

外見は男か女か微妙なところだが、髪型からして男だろう

そしてエルフの様な服を着た少年は御影がいつまでも気づかないことに苛立ち始め、御影達を追い抜き、その前に立ちつくし、御影に怒気を含めてこう言い放つ

「お前らしい加減気付け

ッ!」

気付かない

普通に通り過ぎた

身長が低すぎて視界に入らなかったのか……?

そうエルフの様な服を着た少年は思い、再度挑戦してみた。

何回も何回も試す。何回も何回も試す

気付いてくれない。その時エルフの様な服を着た少年は走りながら本当にさびしげに顔を竦めた

そしてエルフの様な服を着た少年は気付く。

あれ、止まっている……

気付けば御影は少年の存在に気付いていた

「……お前誰だ? ここで何してんだ?」

少年は御影を見てホロツと涙をうかべ、御影を好きになる

少年は孤独な孤独な生命体

人間に好かれようとした孤独な男の子

そしてこの少年の存在がこれからの人間価値ゲームに大きな影響を

与えることとなる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2728y/>

きまぐれ神

2011年11月17日20時11分発行